思い出に残る自然風景に関する研究

Characteristics and Structure of Memory of Landscape Past

古谷勝則*
Katsunori FURUYA

摘要：人が風景を体験し、強い感動を受けるような思い出に残る自然風景を調査した。一般社会人にアンケートを送付して183名から回答を得た。体験年齢、視点場と視対象、体験した状況を整理・分析し、以下の成果が得られた。1) 視点場は、山頂や海岸、草原だけでなく、道路や展望台、橋も重要である。2) 視対象の構造は、対象物の空間分布を視知覚で認識しているのに加え、時間や季節の変化要因が自然風景に彩りを加えている。3) 季節は夏と秋が多く、体験時間は午前中に72%が体験している。空は晴れていて、陽射しが強く、明るい場合に、感動することが多い。一方、朝や夕方の風景も感動することが多い。温度や風の影響は少ない。

1. はじめに

自然と人間の共生した、潤いのある環境を創造保全していくためには、規範となる風景を知る必要がある。従来から研究されてきた視覚認知できる風景の形や色彩の見え方の問題を検討するだけでは、風景の共通性を体系化することはできない。本研究では、人間が風景を体験し強い印象を受けるような「思い出に残る風景」を研究することにより、自然風景の視点場と視対象の整理から、景観保全のための基礎資料を提供することを意図する。

景観研究では、研究用に用意された写真などを分析対象にして、枠取られた静止景観の一部を分析する傾向があり、物理的対象物の特徴や評価を検討することが多い¹⁾。本来、風景は目でとらえる対象と心で意識された対象が一体のものであるが、目でとらえる研究に片寄る傾向がある。そこで、本研究では、思い出に残る自然風景を調べることで、心で意識された自然風景を明らかにすることを目的とした。研究の方法は、まず①人間の成長の過程で自然風景が何才ごろ認識されるかを明らかにした後に、②初めて思い出に残った自然風景の視点場と視対象を整理した。次に、③人生の中で最も感動した自然風景の視点場と視対象、体験した状況を整理した。

風景の思い出に関する既往研究については、「体験された風景」の構造を対象と人間との関係で比較した堀ら²⁾の研究、青年の「原風景」の特性と構造を風景のタイプで類型化した茂原ら³⁾の研究、「好ましい景観」の類型化により共通性の体系化を行った平尾ら⁴⁾の研究、「原風景」の概念を「原環境」に拡張して住環境の理想像の類型化を行った周ら⁵⁾の研究、東京農業大学⁶⁾の研究室に在籍、在職した49名の原風景をまとめて出版された「原風景の研究」などがある。本研究はこれら前例を参考にしながら、写真の趣味を持つ一般市民の自然風景の思い出を調査し、感動した自然風景の視点場と視対象を分析するものであり、本研究の独自性もここにあると考える。

2. 調査方法と回答者の属性

自然風景を主な対象とした写真コンクールに、国立公園協会が主催している「国立公園国定公園写真コンクール」がある。このコンクールに応募する人々は、自然風景に対する造詣と経験が深いと考え、写真コンクールに応募された方々を対象に、アンケートを行った⁷⁾。この結果より、思い出に残る自然風景の分析を行っ

た。

調査は「自然風景の思い出に関する調査」と題して、郵送によるアンケートを実施した。調査の概要と調査項目を表-1に示した。アンケートを1997年4月に送付し、183名の方々から回答を得、回収率は49.1%であった。調査対象者は地域別に見ても日本全国に広く分布している。アンケートは研究目的に添った内容の設問に対し、風景のイメージ絵と説明文を記述させる方法をとった。ただし、記述にあたっては、完全な自由記述にするのではなく、風景を記述する文章を用意し、その文章に単語を記述してもらう形式とした。例えば、初めて思い出に残った風景の設問では、「() から () を見ている風景」という文を与え、この文の括弧を埋めてもらう方法をとった。この設問形式を使うと、調査目的に添った視点場と視対象を適切に把握し、調査対象者自身の言葉を使って答えてもらえる利点がある。反面、数値データでないので処理が難しい。

回答者の属性を表-2に示した。回答者の平均年齢は、54.3

表-1 調査の概要

調査日時	1997年4月
調査対象	(財)国立公園協会が主催する「第45回国立公園国定公園の写真コンクール」(1997年2月締切)応募者
調査方法	郵送法
回答票数	183名(回収率49.1%、配布数373名)
地理的分布	北海道31名、東北49名、関東83名、中部65名、近畿68名、中国23名、四国16名、九州37名、沖縄1名
調査項目	1.初めて思い出に残った自然風景 ・年齢、場所、視点場、対象場、イメージ絵 2.一番感動した自然風景 ・年齢、場所、視点場、対象場、イメージ絵 ・空、太陽、陽射し、明るさ、見通し、気温、風 ・年月日時 3.好きな風景、国立公園・国定公園 4.海外の国立公園・風景の勝れた場所の経験 5.日本の国立公園に望むもの 6.回答者の属性 ・年齢、性別、写真歴、趣味、教育年数、子供の頃の環境

*千葉大学園芸学部緑地・環境学科

表-2 回答者の属性

年 齢	30才未満 5名、30才以上45才未満 34名、45才以上 60才未満 67名、60才以上 74名、未記入3名
性 別	男 170名、女 12名、未記入 1名
写 真 歴	3年未満 10名、3年以上10年未満 30名、10年以上 140名、未記入 3名
教育年数	～10年 31名、11～15年 88名、16年以上 50名、未 記入 14名
子供の頃 環 境	自然に囲まれて育った 148名、自然の少ない所に育 った 30名、未記入 5名

歳であり、回答者に、中高年が多いと言える。また、性別では男が170名、女が12名でかなりの偏りが見られる。写真歴は、10年以上が140名であり、多くの人が写真撮影を長くやっている愛好家である。学歴では高等教育を受けた人の割合が高い。このことは平均年齢が高いことを考え合わせると、かなりの高学歴集団だったといえる。写真以外の趣味では登山や旅行、音楽、美術などが多く見られる。回答者の子供の頃の生活環境では、全体の80%が子供の頃に自然に囲まれて育っている。これらアンケート回答者の特性を見ると、自然風景の一般論を導き出すには、回答者の属性が片寄っていると思われる。しかし、「国立公園国定公園の写真コンクール」に応募する方々は、自然風景の経験が豊富

図-1 自然風景を体験した年齢

図-2 初めての思い出に残った風景と原風景の体験年齢

であり、それら経験の中でも特に印象に残っている風景を回答することになるので、特徴的な自然風景を調査するのに有効と考えた。

3. 自然風景を体験した年齢

(1) 初めて思い出に残った自然風景

人が生まれてから死ぬまでの間、周囲の環境や風景を見ているはずであるが、意識の上で周囲の自然環境を認識するようになるのは何才くらいであるのか。人はそれぞれに、意識の上で初めて自然風景を体験し、思い出に残った年齢があるはずである。この初めて思い出に残った歳の設問に対し、175名が回答してくれた。回答者の現在の年齢と体験した年齢を図-1に○印で示した。初めての思い出は3才から46才まで、幅広い年齢に見られたが、平均は16.4才である。回答者の年齢に関係なく20歳以下で思い出に残ると回答した人が多く、有効回答者の80%を占めている。次に、青年の原風景を体験した年齢と比較するために、茂原ら³⁾の研究の結果と比較したグラフを図-2に示した⁸⁾。この図によると、茂原らの原風景を体験する年齢が4才から12才までの間に多く分布しているのに対し、思い出に残った自然風景では5才から20才までの幅広い年齢に分布している。この差は、茂原の研究が原風景を対象に青年に質問しているのに対し、今回の調査が、自然風景に限定して幅広い人に調査しているためと考えられる。また、幼い頃の風景の記憶はディテールが喪失し断片的であり、中学生以降になって風景の全体像を思い出せるようになる⁶⁾ことが多いので、今回の調査対象のように自然風景に限定した場合、体験の平均年齢が高くなることも考えられる。今回の調査では3才から8才までの体験が全体の15.4%であり、10才から20才までの体験が64.0%、21才以上の体験が20.6%である。このことから、10才以降20才前後までの思春期に思い出に残る自然風景を体験している場合が多数有ることがわかった。進士は原風景を、「幼少期ならびに思春期(20歳前後)の生活環境の風景や体験の全体像、風景のみならず風土・気候・人間・歴史などが醸し出す原イメージや方言・習慣・体験などを含んだ原体験に、自分自身の内面、すなわち内なる風景が一体になった個人の所産である⁹⁾」と定義している。本研究で明らかにした幼少期ならびに思春期に思い出に残った自然風景体験が原風景の所産の一部になっているはずである。

(2) 一番感動した自然風景を体験した年

一番感動した自然風景を体験した年を図-1の□印と図-3に示した。図-1からわかるように一番感動した自然風景は20才以上で体験することが多い。図-3¹⁰⁾より、1年前に一番感動

図-3 一番感動した自然風景を体験した年

図-4 一番感動した場所のイメージ絵の例

した自然風景を体験した人が26名で最も多く。全体の半数の人が6年以内に一番感動した自然風景を体験している。時が経つと記憶が薄れるのと同じように自然風景の強い感動も時が経つと薄れる。このため、感動が薄れずに残っている近年に体験した自然風景を一番感動した自然風景と回答してる。また、写真を趣味にした人達を調査対象にしたことにより風景を写真の成果品として捉えてしまう危険性から、一番感動した自然風景の体験が近年に多くなったとも考えられる。一方、10年前より以前に体験した自然風景を一番感動したと回答した人が43.2%おり、長い時間を経ても感動が維持される場合も多数あることがわかった。

4. 自然風景の視点場と視対象

(1) 視点場と視対象の解析方法

景観とは眺めている人と見ている環境から成り立つものである。本研究では、自然風景を体験した場所を視点場、眺めている対象を視対象¹¹⁾と呼ぶことにした。視対象には、見ている風景の構成要素だけでなく、紅葉や朝日などの風景の現象の記述も含めて解析している。

初めて思い出に残った自然風景を答えてくれたのは173名である。一番感動した風景を答えてくれたのは、179名でそのうち地図を描いてくれた人は99名、イメージ絵を描いてくれた人が31名だった。イメージ絵の例を図-4に示した。このような図と記述式の設問を基に解析を加えた。視点場と視対象の設問の回答は、回答者自身の言葉で記述してもらった。自由記述の結果をそのままでは集計することが難しいので、似た回答を集めてグループを形成した。グループ編成過程では小グループから大グループに編成されて行くが、説明がしやすいように階層化されたグループを大きいものから第1グループ、第2グループの順に呼称した。図-5では、第1グループは最も大きいグループであり、グループの名称をそれぞれ「静止視点場」「移動可能視点場」とした。第2グループは、その下にくる階層で、「山」「水辺」「農村」などからなり、第3グループは「山」「草原」などからなる。さらに最下層に、「山頂」「山」「尾根」などが構成要素として整理された。

静止視点場 125				移動可能視点場 51	
山 40	水辺 42	農村 4	特定の場所建物 21	交通 51	
山 40	海 16	畑 3	展望台 11	乗り物 25	
山頂 22	海岸 13	煙 3	建物 8	車 11	
山根 8	海 3	郊外 1	住宅 3	列車 8	
尾根 6	湖 11		旅館 3	船 6	
谷 2	湖岸 6	広域の地名 5	家 1	道 25	
火口 2	沼 5	地名 5	浴家 1	道路 10	
			公園 2	合道 5	
平坦な土地 11	川 15	季節 2		歩道 2	
草原 10	河川 3	雪 2		橋 8	
丘陵 1	土手 3			歩き 1	
	川岸 3				
	川岸 2				
	岩場 2				
	滝 2				

図-5 初めて思い出に残った自然風景の視点場

(2) 初めて思い出に残った自然風景

初めて思い出に残った自然風景の視点場をまとめた図-5を見ると、第1グループでは、「静止視点場」が125名、「移動可能視点場」が51名である。「静止視点場」は「水辺(42名)」「山(40名)」「特定の場所建物(21名)」などから構成されている。第3グループで10名以上の回答のあったグループは、「山(40名)」「乗り物(25名)」「道(25名)」「海(16名)」「川(15名)」「湖(11名)」「展望台(11名)」「草原(10名)」である。第3グループで数の多い「山」の視点場としては、山頂、山、尾根などからなり、「乗り物」は、車、列車、船などからなる。「道」の視点場としては、道路、橋などからなる。初めて自然風景を体験する視点場としては、山頂や海岸、草原などの自然環境が重要である。また、展望台や橋、車や列車の走る道路なども景観体験の視点場として重要である。

図-6は、初めて思い出に残った自然風景の視対象をまとめた。第1グループの視対象は「空間的視対象(143名)」「時間的視対象(43名)」「経験・心象(6名)」「移動可能視対象(5名)」であり、合計197名である。視対象に「山並みと夕焼け」、「火口と噴煙」などのように複数の答えを記述した場合、視対象として2度カウントしたため、回答者数の183名より多くなった。「空間的視対象」は、山や水辺、平坦な土地、農村、植物あるいは特定の建物などのグループである。「移動可能視対象」は、鳥や馬などの動物などの生き物や船などの乗り物のグループである。「経験・心象」は、人間の行為の経験や、詩や歌に記述された景色の心象風景などのグループである。「時間的視対象」のグループは、夕日や朝日、雲などの「時間変化」のグループと、新緑、紅葉などの「季節変化」のグループからなっている。第2グループを回答数の多い順に並べると、「山・山並み(74名)」「水・水辺(43名)」「時間変化(31名)」などである。「山・山並み」の回答者数は、全回答者197名の36%を占めている。第3グループでは、「山(57名)」が最も多く、次に「海(18名)」「太陽(18名)」となっている。

設問が自然風景を対象にしているので、「山・山並み」のグループが多くなるのは当然であるが、工作物や船、田などの人工物が視対象となる場合や、ジミ採りや魚釣りなどの人間の行動が自然風景体験の一部となっている場合もあった。また、天候の変化や太陽の変化など時間変化がもたらす体験や、春、秋、冬などの季節変化の体験などがあり、思い出の自然風景が物理的空間の対象と、変化要因から構成されていることがわかった。さらに、人

空間的視対象 143			移動可能視対象 5		時間的視対象 43	
山・山並み 74	水・水辺 43	農村 5	動物 3	季節 12	時間変化 31	
山 57	海 18	田 3	鳥 2	春 4	太陽 18	
富士山 9	海と島 3	田園 1	馬 1	花 2	夕日 11	
利尻富士 3	海平線 2	農村 1		新緑 2	朝日 6	
穂高岳 3	海岸 5			紅葉 1	曇り 1	
尾根 2				秋 1	天気 10	
その他山 35	湖 13	特定の場所建物 5	乗り物 2	紅葉 1	雲 6	
火口 3	中津寺湖 1	高部ダム 1	船 2	冬 7	霧 2	
山並み 17	琵琶湖 1	五重塔 1		枯れ木 1	稲 1	
	琵琶湖 1	水車小屋 1			稲穂 1	
平坦な土地 12	琵琶湖 2	トンネル 1			月 1	
開闢 7	池 2					
地平線 1	川 12	植物 4				
360度展望 1	川 6	樹木 3				
その他 5	溪谷 3	ススキ 1				
草原 5	池 3					

図-6 初めて思い出に残った自然風景の視対象

間の経験や心象が感動する自然風景体験の一部を成していると考えられる³⁾。

(3) 一番感動した自然風景

一番感動した自然風景は、初めて思い出に残った自然風景を体験した後、数多くの自然風景を体験した中で最も感動した風景である。

一番感動した自然風景の視点場を図-7にまとめた。第1グループは「静止視点場(149名)」[移動可能視点場(34名)]からなる。第2グループを回答数の多い順に並べると、[山(65名)]「水辺(38名)」[交通(34名)]「特定の場所建物(24名)」[平坦な土地(17名)]「農村(3名)」[広域の地名(2名)]となる。第3グループで多い順に並べると、[山(65名)]「湖(22名)」[道(21名)]「展望台(15名)」[海(12名)]である。

一番感動した自然風景の視対象を図-8にまとめた。第1グループは、「空間的視対象(143名)」[時間的視対象(50名)]「移動可能視対象(5名)」からなり、合計198名である。「空間的視対象」のグループは、「山・山並み(74名)」[水・水辺(44名)]「平坦な土地(9名)」[植物(7名)]「農村(6名)」[動物(4名)]「特定の場所建物(3名)」からなる。「時間的視対象」のグループは、朝日、夕日、雲などからなる「時間変化(40名)」と雪、樹氷、紅葉などからなる「季節(10名)」からなる。

初めて思い出に残った自然風景の視点場で回答数の割合を見ると「静止視点場」と「移動可能視点場」の割合が71:29なのに対して、一番感動した自然風景の「静止視点場」と「移動可能視点場」の回答数の割合が81:19となっている。一番感動した自然風景の「静止視点場」の割合が増加し、「移動可能視点場」の割合が減少している。これは、一番感動した自然風景の視点場における「山」の回答数が増加し、「乗り物」の回答数が減少したためである。

また、初めて思い出に残った自然風景の視対象と一番感動した自然風景の視対象を比較すると、初めて思い出に残った自然風景の視対象にあった「経験・心象」がなくなっている。この他の「空間的視対象」「時間的視対象」「移動可能視対象」には大きな違いは見られない。

初めて思い出に残った自然風景と一番感動した自然風景の視点場と視対象を整理することにより、思い出の自然風景の構成要素を分類することができた。人間は初めて思い出に残った自然風景の後に数多くの自然風景を体験する。その体験の中から最も感動した自然風景を回答してもらったが両者に大差がないということは、アンケートの設問で自然風景という限定を加えたことにより、結果の構成要素が限定されたとも考えられるが、自然風景の感動

の源泉は、初めての時も経験を積み重ねた後もあまり変化しないと考えられる。

5. 一番感動した自然風景を体験した時の状況

今までに一番感動した自然風景を体験した時の状況を調査した結果を図-9～図-16に示した。

図-9の体験した月は、10月が30名、8月が26名、7月が17名であり、夏と秋が多い。夏は、夏休みがあり旅行シーズンでもあるため体験する機会が多いためと考えられる。秋は、四季の移り変わりの中で、最も彩りが鮮やかで、初秋から晩秋にかけて自然風景全体の色合いの変化も大きいため、感動することが多い。

図-10の体験した時間は、6時が34名、7時15名であり、朝に体験することが多い。午前中と午後の比較をすると、午前中111名、午後44名である。午前が有効回答数の72%を占めている。夜明け後しばらくの6時が極端に多いのは写真撮影を趣味にしている人を対象にしている特徴をよくあらわしている。朝夕は光の変化により刻々と風景が変化し、朝焼けや夕焼けを体験することができる。また、太陽光が低いと斜めの光を受けるので、陰影がはっきりして立体感がでるために写真撮影に向いている。この他に午前が多い理由としては、午前中大気澄んでいて遠方まで見えるのに対して、午後になると空気中に水蒸気があがってしまい視界が落ちることも理由として考えられる。さらに、朝早起きをして散歩をするすがすがしさを感じるように、朝の時間帯がもつ風景以外の要因も大きいかもしれない。

一番感動した自然風景の空の状態を、天気と陽射しと風景の明るさについて調査した。図-11の天気では、快晴が77名、晴れが41名、曇りが26名であった。陽射しの設問では、回答に陽射しの強さを述べた人と、陽射しの特徴を述べた人がいたので、別々に分けて集計した。図-12の陽射しの強さでは、強が35名、良好が17名、無しが15名であった。図-13の陽射しの特徴では、朝焼・夕焼が25名、斜光が10名、柔らかが8名、部分が7名であった。図-14の明るさは、薄暗いが48名、明るいのが35名、良好が29名であった。空の状態が、快晴あるいは晴れていて、陽射しが強く、明るい場合に、感動することが多い。また、陽射しが無しあるいは薄日の状態で、明るさが薄暗い、朝や夕方の風景も感動することが多い。

一番感動した自然風景の温度、風を調べた結果、図-15の温度は10度が13名、20度が12名、15度が9名となった。しかしながら、風景を体験したときに温度計で測った人はほとんどいないので、今回の設問では、感覚的に答えていると推察される。こ

静止視点場 149				移動可能視点場 34
山 65	水辺 38	農村 3	特定の場所建物 24	交通 34
山 65	海 12	農村 3	展望台 15	乗り物 13
山頂 31	海岸 5	煙 1	建物 5	列車 6
山根 31	岬 3		旅館 1	飛行機 3
尾根 3	海 2		山小屋 1	船 1
	島 2		異人館 1	
平坦な土地 17	湖 22	広域の地名 2	家 1	道 21
草原 9	湖池 9	地名 2	風呂 1	道路 6
草原 2	沼 4		港 1	道端 6
樹林 2	川 4		古墳 1	歩道 4
高原 1	川 3		公園 1	峠 1
	滝 1		広場 1	田舎道 1
水河 1				駐車場 1
崖 1				橋 2
砂丘 1				

図-7 一番感動した自然風景の視点場

空間的視対象 143		移動可能 視対象 5	
山・山並み 74	水・水辺 44	動物 4	
山 66	海 18	鳥 3	
富士山 13	海 9		
阿蘇山 4	海岸 6	カモシカ 1	
穂高岳 4	島 3		
ス 4			
その他山 40	湖 19	乗り物 1	
火口 1	火口 湖 3	船 1	
	船路湖 1		
山並み 8	田沢湖 1		
	穴道 湖 1		
	中禅寺湖 1		
	十和田湖 1		
	猪苗代湖 1		
	その他湖 7		
	沼 2		
	池 1		
	川 7		
	川 6		
	滝 1		

数字は有効回答数
合計198名

図-8 一番感動した自然風景の視対象

のため、回答が、切れの良い10度や15度、20度などに集まっていた。そこで、全体的な傾向を見るために、移動平均をとることにした。移動平均の間隔は、回答のピークが5度ずつくる

ことから、前後2度ずつの5度の範囲の移動平均を求めた。この結果、感動した自然風景を体験した温度は0度前後から20度前後の間で体験することが多いことが明らかになった。26度以上の

高い温度が少ないのに比較して、-10度を回答した人が6名いる。これは、樹氷や雪の風景などの季節感のある冬景色の場合である。図-16の風では、無風81名、微風30名であった。自然風景の体験では、風による感動体験への効果は少ないようである。

図-9 一番感動した自然風景を体験した月

図-13 一番感動した自然風景を体験した陽射しの特徴

図-10 一番感動した自然風景を体験した時間

図-14 一番感動した自然風景を体験した明るさ

図-11 一番感動した自然風景を体験した空の状態

図-15 一番感動した自然風景を体験した温度

図-12 一番感動した自然風景を体験した陽射しの強さ

図-16 一番感動した自然風景を体験した風

6. おわりに

本研究では、思い出に残った自然風景の体験年齢、視点場と視対象、体験した状況を整理することにより、思い出に残る風景の特徴の分析を試みた。今回の研究報告の成果として以下の点があげられる。

1) 初めて思い出に残る自然風景は、ほとんどの場合20才以下で体験し、幼少期(3才~8才頃)よりも思春期(10才~20才頃)に体験する人が多い。

2) 一番思い出に残る自然風景は、全体の半数の人が6年以内に体験している。一方、10年前より以前に体験した自然風景を一番感動したと回答した人も多数いることから、長い時間を経ても感動が維持される場合も数多くあることがわかった。

3) 初めて思い出に残った自然風景の構成要素と一番感動した自然風景の構成要素に大差はなく、自然風景の感動の源泉は初めての時も経験を積んだ後もあまり変化しないと考えられる。

4) 思い出に残る自然風景の構造は、視点場の特性によって視対

象の見え方が変化している。視対象は、物理的対象物の空間分布を視知覚で認識しているのに加え、時間や季節の変化要因が自然風景に彩りを加えている。

5) 思い出の自然風景を体験した月は、夏と秋が多く、体験時間は朝と夕が多くなっている。特に午前中に72%が体験している。空の状態は、快晴あるいは晴れていて、陽射しが強く、明るい場合に、感動することが多い。また、陽射しが無しあるいは薄日の状態で、明るさが薄暗い、朝や夕方の風景も感動することが多い。感動した自然風景を体験した温度は0度前後から20度前後の間で体験することが多く、風による感動体験への効果は少ないようである。

本論文では、思い出に残る自然風景の体験年齢、視点場と視対象、体験した状況を明らかにした。今後、分類した視対象のグループ別に特徴的な景観の類型化を行い、類型別の体験状況の特徴の違いを明らかにする予定である。

この研究は、環境庁国立環境研究所の青木陽二主任研究官と共同で行ったアンケートの成果を用いて執筆した。著者を環境庁国立研究所の共同研究員として採用する労をとり、結果のとりまとめに適切なアドバイスを頂いた青木陽二主任研究官に感謝の意を表す。また、調査の実施にあたって名簿の便宜をはかって下さった(財)国立公園協会の塚本辰雄氏と油井正昭千葉大学教授にも感謝する。

参考文献及び補注

- 1) 古谷勝則, 麻生恵, 青木陽二(1997): 景観研究の流れと今後: ランドスケープ研究 61(1), 77
- 2) 堀繁, 栗原正夫, 篠原修(1988): 体験された風景の構造: 造園雑誌 51(5), 287-292
- 3) 茂原朋子, 渡部貴介, 十代田朗(1991): 青年の“原風景”の特性と構造に関する研究: 都市計画学会学術研究論文集, 457-462
- 4) 平尾和洋, 宮嶋聡, 川崎清(1995): 「好きな景観」写真展にみる景観読解過程と景観タイプ: 日本建築学会計画系論文集 第472号, 123-132
- 5) 周静敏, 服部岑生, 真境名達哉(1995): 居住体験と住環境の理想像の類型: 日本建築学会計画系論文集 第477号, 63-70
- 6) 東京農業大学庭園学・造園学原論研究室(1996): 原風景の研究: 東京農業大学出版会, 286pp
- 7) 青木陽二, 古谷勝則(1997): 『自然風景の思い出に関する調査』の結果について: 国立公園 557, 18-21
- 8) 茂原³⁾の図から小数点以下の年齢の頻度まで読み取れなかったため、近似の整数値に置き換えてグラフ化した。
- 9) 東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会(1985): 造園用語辞典: 彰国社, 173
- 10) 図-3で、今年体験した人の人数が4名と少ないのは、4月に調査したので冬から春先の期間の体験しか回答されていないためである。
- 11) 篠原¹²⁾の操作的景観把握モデルでは、景観構成要素を視点、視点場、主対象、対象場ととらえている。本研究のアンケート結果からは、操作論的景観把握モデルでいうところの主対象が対象場のどこにあるのか、あるいは自然風景が主対象であるか対象場であるかを、判断できない。また、紅葉や朝日などの風景の現象の記述を対象場に含めることができない。そこで、眺めている対象を視対象と呼ぶことにした。
- 12) 篠原修(1977): 土木工学大系13 景観論: 彰国社, 50-51
- 13) 樋口忠彦(1975): 景観の構造: 技報堂, 168pp
- 14) ケヴィン・リンチ著, 丹下健三, 富田玲子訳(1968): 都市のイメージ: 岩波書店, 276pp
- 15) 小林亨(1993): 移ろいの風景論: 鹿島出版会, 277pp
- 16) 高橋進(1982): 風景美の創造と保護: 大明堂, 206pp

Summary: From the moment they were born they gradually become aware of their surrounding. And, they experience many landscapes, and gain the memory of landscape. This paper aims to reveal what scenes they regard as the memory of landscape, and when they gain the memory of landscape. The results are as follows;

- 1) Points of view in natural landscape are not only top of a mountain, coast, and meadow but also road and observatory and dridge.
- 2) The structure of natural landscape are recognized the spatial distribution of objects. In addition, the changeable factors of time and season influence the recognition of natural landscape.
- 3) The 72% of them gain the memory of landscape in the morning.
- 4) They often gain the memory of landscape when it is fine weather and bright sunshine.
- 5) There are few influence of temperature and wind.